

2020 年度
卒論・3年次論文集

2021 年 3 月

慶應義塾大学法学部政治学科

塩原良和研究会

(論文インテンシブコース)

指導教員より

みなさんにとっても僕にとっても、これまでになかった1年間が終わろうとしています。その前年まで、みなさんと一緒に飲み会をし、合宿をし、大声で議論し笑いあっていたのが、遠い昔の出来事のように行ってきた「対面での出会い、話すこと」の大切さを、改めて感じています。

いっぽう2020年度は、対話、居場所、そして共生という、このゼミでみなさんと模索してきた概念の重要性と、みなさんが積み重ねてきた実践の真価が問われた年でした。年度の初め、大学教育の現場を含む日本社会全体を覆っていた「自粛」の空気に配慮すれば、対面でのフィールドワークを全面的に中止するという選択もあり得ました。実のところ、そのような判断に傾きかけたことも、何度もありました。

そんなとき、僕はみなさんがフィールドで充実した時間を過ごしている様子を、思い起こしていました。みなさんが投稿したフィールドノートに描かれた迷いや葛藤、後悔や悲しみ、そして喜びと成長の軌跡を、読み返してみました。実際にフィールドに赴き、そこが人々のかけがえのない居場所になっている光景を目の当たりにしました。そして、久しぶりに教室に響いたみなさんの声と、そこで知的なたくましさを増していくみなさんの姿を見たとき、教育は「不要不急」などでは決してないのだという、あたり前のことに気づくことができました。感染リスクをできる限り小さくするのは、言うまでもないことです。そのうえで、このゼミで僕たちが行ってきた取り組みに「対面」が不可欠なものである以上、なんとか工夫して続けていく。そう覚悟を決めることができたのは、みなさんのおかげでした。本当に、感謝しています。

本年度より、卒業論文・3年次論文を執筆するゼミ生（論文インテンシブコース）と、フィールドでの活動に重点的に取り組むゼミ生に分けて指導を行うことにしました。学術論文を書く経験は文系学部教育において極めて重要だと、僕は思っています。しかし大学教育への社会的要請や、大学生が習得すべき知のあり方が多様化するなかで、長期間の地道な積み重ねが必要とされる論文執筆には、覚悟と熱意をもった学生に取り組んでもらうべきです。本論文集に収録されたみなさんの論文を読む限り、僕の判断は間違っていないでした。コロナ禍の難しい状況のなか、フィールドワークを続けながら、怠ることなく学問に励んだみなさん努力の結晶であり、どれも例年以上の力作だと思います。みなさんの論文は後輩たちにも読み継がれ、このゼミの財産になっていくことでしょう。本当に、お疲れさまでした。なお、本論文集には4年生の卒業論文だけではなく、『政治学研究』に掲載された3年生の論文と、来年度完成予定の3年次論文の題目も掲載させていただきました。

卒業していくみなさんは、OB・OG会などで再会するときまで、どうかお元気で。新4年生のみなさんとは2021年度も、充実したゼミ活動をいっしょに創り上げていきましょう。

2021年3月
慶應義塾大学法学部教授
塩原良和

目次

—卒業論文—

阪神・淡路大震災における地方紙と全国紙地方版の比較研究 ——発生直後と20年後を通して 田中友樹	1
地方の若者は地域間格差をどう生きるか ——地方都市の若者の地域移動の意識と実態 『政治学研究』掲載予定 川浪 大吾	21
移民と地域との関わりについて ——スイスに暮らす日本人移民へのインタビューを通じて 日比野 亘平	57
グローバル化とナショナリズム ——ポーランドを中心に 小林 杏歌	102
外国につながる子どもたちへの就学前教育支援のあり方 ——日独比較から 浅野 有依	149
若者が居場所に巡りあうために 佐藤 みゆき	173
流行語から見る韓国の若者の現状 ——2014年以降を中心に 『政治学研究』掲載予定 李 エステル	201

(卒業月・学籍番号順)

—3 年次論文—

なぜ女性はハイヒールを履くのか
——#KuToo から考える職場の着装規範 『政治学研究』掲載予定
栢菅 美咲256

銭湯の社会学
——「公」と「私」をめぐって 『政治学研究』掲載予定
三宅 里佳279

映画「落ち穂拾い」
広瀬 奈美
(題目のみ・2021 年度完成予定)

多文化共生と地方創生の相互関係性
白石 千晶
(題目のみ・2021 年度完成予定)

地元へのまなざし
佐藤 理人
(題目のみ・2021 年度完成予定)

社会階層が在日中国人の被差別経験に与える影響
文 受彬
(題目のみ・2021 年度完成予定)

(学籍番号順)

※本論文集掲載論文の引用・紹介について

本論文集に収録されている論文の内容の外部での引用・紹介を希望する場合は、著者本人と塩原に事前にご相談ください(塩原ゼミウェブサイト、および『政治学研究』にて公開・掲載されている論文は、自由に引用・紹介していただけます)。